

序章

前身校の歩み

1 北陸金沢の文教風土	4
2 前身各校の変遷・要約	
(1) 第四高等学校	7
(2) 石川師範学校	8
(3) 石川青年師範学校	8
(4) 金沢高等師範学校	9
(5) 金沢医科大学	9
(6) 金沢医科大学附属薬学専門部.....	10
(7) 金沢高等工業学校.....	10

CONTENTS・前身校の歩み

1 北陸金沢の文教風土

16世紀の著作とされる『^{ジン(ニン)コクキ}人国記』(底本は春琳本、岩波文庫『人国記・新人国記』所収)の加賀国の項には、次のように記されている。

…諸事の道につき、吾が国より外に差して替る道理あるまじきなどと、他を求むる気これ無き風俗にして、諸事に^{なす}泥みやすく、何れの道にてもこれに従ひて学ぶといへども、やがてその気退屈して、半途より捨つるの類多し。さればその気を流通して、克己の工夫に力を入れずして、自然と怠りの気に馴れたるものなり。

すべて諸事、この国になす処より外は、他にあるまじきと思ふ意地なくば、深く学ぶ志強かるべきゆゑ、天下の定規ともなるべき国風なるに、最も氣質の斯の如きこと、浅ましき次第なり。

(下線引用者)

江戸時代になって、1701(元禄14)年に出版された関祖衡『新人国記』(同上書所収)では、前述の『人国記』の記述をもとにして、次のように書かれている。

譬へば他国に合戦ありて、これより助勢すべき事ありても、自国を全うして出づる事を好まず。まして我が持ちの他を望みて、切り取るなどする事は、盗賊なりとて嫌へり。皆人この覚悟にて賢人の風なり。

されど物ごと^{けだい}懈怠がちになる風にて、我が国一分にてしまふ(自分の国のやり方で通してしまう)気ありとぞ。

(下線引用者)

これらの含蓄ある記述から、16～17世紀ごろの加賀は、すでに「天下の定規ともなるべき国風」とか、「賢人の風」などと形容され、かなり文化程度も進んでいたが、他方では、進取の氣象に乏しく、自足的・停滞的の傾向があった事が推察される。

江戸時代の加賀藩は、豊かな日本一の大藩として、学術・文化の保護・保存・育成に力を入れた事はよく知られている。五代藩主で名君といわれた前田綱紀(1643～1724年)が、その1691(元禄4)年の「大願十事」の内の9番目において、「先聖殿並学校造営事」を挙げていた事はよく知られているが、この時代には、藩校は創立されなかった。藩校を

現在の高等教育機関になぞらえることは疑問もあるが、どこの藩でも少なくとも儒学の教官には、当時藩の第一級の儒者を任命し、専門学者による国学や算学、暦学を教えた場合も多いので、一藩の学術・文化の淵藪になった事は事実である。

加賀藩藩校「明倫堂」「経武館」の創立は、1792（寛政4）年である。尾張藩62万石藩校「明倫堂」の創立は藩祖義直（1600～50年）の時代であり、全国で最も早い。紀伊藩55万石の「学習館」は1708（宝永5）年、仙台藩63万石の「養賢堂」は1736（元文元）年、熊本藩54万石の「時習館」は1755（宝暦5）年、薩摩藩77万石の「造士館」は1773（安永2）年とみてくると、加賀藩校の創立は大藩の中ではむしろ遅かったと言える。しかし、加賀藩校の場合、武士本位の学校でありながら、「四民教導」を創立の初めから標榜し、部分的ながらもそれを実践したこと。和学・漢学・医学・算術・習字・習礼・歴史・天文・暦学・詩文・法律・本草学の12の専門学の科目を立て、実施しようとした。これらは寛政期までの他藩の藩校にはみられない特徴であった。（笠井助治『近世藩校に於ける学統学派の研究 上』1969年）

海岸線が長い加賀藩の「西欧の衝撃」（1853年、ペリー来航）に対する対応も早く、本格的だった。1854（安政元）年には、洋学の習得のために「壮猶館」（兵学校。学科として航海測量・洋学・医学・数学も教えた。）を創設した。1863（文久3）年には、そこから「西町軍艦所」「七尾軍艦所」を分立し、航海学・測量学の教授と航海実習を本格的に開始した。なお、七尾軍艦所には、1869（明治2）年12月になって英・仏・独語に通じたオズボンを迎えて（七尾）語学所を開き、同時に同年に金沢にできた「致遠館」から上等生30余名を派遣し学習させ、以後もかなりの数の学生が派遣された。この中には、タカジアスターゼの創製者高峰讓吉や日本最初の理学博士桜井錠二など、のちに理系の学者あるいは軍人として名を馳せた人物が多い（今井一良『オズボン紀行』北国新聞社、1994年）。なお、金沢大学で最も創立の古い医学部創立時期とされる1862年は、「金沢藩種痘所」が設けられた年である。

幕末の1866（慶応2）年の明倫堂改革では、皇学・漢学・洋学の三学を鼎立させ、他方で、漢学の初歩段階である句読教授を明倫堂から切り離した。明倫堂を総合的な中・高等教育機関にしてゆこうとしていたのである。そして、1868（明治元）年12月には、北越出征兵士の凱旋を契機にして、初等・中等段階を経て、「有禄無足共」に「大学校明倫堂」へ寄宿させ、修業させるという大構想を樹立した。中・高等教育を藩独自で行ってゆこうと更に一步を進めたのである。なお、壮猶館はすでにこの年の9月に廃止し、明倫堂に統合している。（倉沢剛『幕末教育史の研究』三、吉川弘文館、1986年）

1867年に卯辰山養生所、68年に「道済館」（英仏学の教授）、69年に「致遠館」（英学の教授）、「鉤深館」（艦船運用関連学科の教授）と「挹注館」（英学と漢学の教授）、70年に「医学館」と「鉾山学所」、71年の「理化学校」などの藩立学校を相次いで建て、その組織がえを続けるなど、時代の趨勢に遅れをとらないための専門学術の教授と習得に多くの力を注いだ。この内、医学館・鉾山学所・理化学校には、高額の給料を支払って外国人教師

序章 前身校の歩み

(それぞれにデッケン、スロイスなどを招聘し、学術水準の維持・向上につとめたのである。

明治政府が「大学規則並ビニ中小学規則」(1870年2月)を定めると、加賀藩では他地域に先駆けて、これに倣った「学校改正大綱」を決め、中学西校(皇漢学)と中学東校(洋学)を開校した。医学館のみを残し、他の道済館などの前身各校を2つの学校に統合したのである。さらに、廃藩置県後の1871(明治4)年11月には両者を統合してこの金沢中学校を創立した。この金沢中学校は、中学普通学を経てその最高段階として政治学・法科・理科・業科・文科を設けるというように、多数の洋書専門書の習得を含んだ専門学を独自の構想で立てていた。朝廷をはばかり「大学」の名称こそ名乗らなかったと推測されているが、地域の本格的大学の創設を期したものであり、盛大な開校式も挙行された。しかし、その開校後半年もしない内に、廃藩置県後の政府により旧藩所定の学資が大蔵省に徴収されてしまい、閉鎖せざるを得なかった。(神辺靖光 金沢藩・金沢県の中学校『金沢市史・会報』Vol.14)

その後の高等教育機関の設立、拡充の動向、なかんずく石川県専門学校の創立や、第四高等中学校誘致にいたる石川県や金沢市の高等教育機関維持のための努力と、中央政府との対立や従属の過程やその背景については、本書第1章2節(1)(2)、第3章2節(1)の各項を、それぞれ参照されたい。

なお、戦前の高等教育関係者やその周辺で、北陸の風土をどのようにみており、さらに教育的にいかに対処しようとしていたかについて、最後に簡単に触れておく。

四高の基礎を築いた北條時敬は、1899(明治32)年ごろの訓示の中で、次のように述べている。

北陸八地勢偏僻天候不良ニシテ天ノ恵ム所薄シト謂ハザル可カラズ。此天然ニ和シテ因循年ヲ経バ不識不知神睡リ氣^う餒ヘルニ至ルベシ。土地ノ偏僻ナルハ我ヲシテ素養ヲ厚クセシムルノ資ナリ。暗雲雨雪ハ我身体ヲ鍛錬スルノ鉄錘、我ガ思想ヲ刺撃スルノ^{べんさく}鞭策(むち 引用者)トシ将来ノ天分ヲ全クスルコトヲ期シ本校教育ノ実效ハ一人一人ノ生徒ノ将来ノ運命ノ上ニ顯ハレシコトヲ望ム...

自然や天候の条件の悪さを、逆に身体と精神鍛錬の好材料として積極的に捉え直そうという発想であり、この傾向は四高の伝統の一面として受け継がれ、四高の体育重視の伝統に影響したと言える。

また、四高の校風刷新運動の先頭に立った河合良成(のちの衆議院議員、小松製作所会長)は、「時習寮の過去、現在、未来」(『北辰会雑誌』44号、1906年6月29日)の中で、「翻って金沢市を觀察せよ。風俗は淫靡なり。気候は不順なり。地勢は凡なり。実に青年の客気を消耗して軟化するには殆ど好適の地なり。この間に浮遊する六百の青春ああ危うい

かな。」と風土的不利を指摘し、警鐘を鳴らした。これも当然のことながら、風土の不利な条件を積極的な克服対象としてとらえ直そうという文脈の中で言われたことである。なお、「金沢は淫靡」とする発言は、のちに四高生の間で議論的になり問題化した。

四高の『時習寮史』では、「元来四高は、地理的条件の制約を受けて中央との接触が比較的薄く、時流の浸潤も亦稍々遅く来るものと考えられ、これが四高の長所と同時にその短所をも構成するものと見られる。社会主義、共産主義との交渉に於いても同様なことが言われ、大正後期にも未だ深い影響は蒙っていなかった。」と言っている。

また、高山秋月著「高校の特色」(『高等学校と左傾問題』日本評論社、1932年、『旧制高等学校全書』第4巻校風編所収)では、「四高生の粗野質実鈍重にして悠々たる、時に放縦に流れ易きもの、其中興の校長北條・溝淵両氏に負うところ少なかるまいが、北国の天候と北国人情、特に百万石気分の伝来せる処大なるものがあらう。」と言っている。以上紹介したのは四高関係の記事からのみ拾ったものであり、金沢の地が自然の恵みの豊かな土地であるという事実への言及がほとんどないのが不思議と思われるかもしれない。しかし、それらは戦前の四高関係者から語られた自己鍛練の高揚のための発言の中においてであることも理解しておきたい。

ともあれ、前記のそれぞれが金沢の文教風土の一端を反映しているという事も間違いのないことであろう。

2 前身各校の変遷・要約

金沢大学は、1949(昭和24)年5月31日「国立学校設置法」(法律第150号)に基づいて、金沢にある旧制の高等教育機関を母体に新制国立大学として設置された。次に、その前身となった旧制高等教育機関の変遷について、『金沢大学十年史』(1960年)や『昭和25年度学生便覧』などに従って、簡略に紹介しておく。これら前身校の詳細は第1章・第2章を参照されたい。

(1) 第四高等学校

1887(明治20)年4月、第四高等中学校が第四区内(新潟・富山・石川・福井4県)の金沢に設置される。これは、当時の石川県知事岩村高俊らの働きかけによるところが大きい。高等中学校の金沢誘致は、戦前期をとおして北陸金沢の文化的優位性を顕示する結果ともなり、戦後の北陸総合大学設置の動きにおいても重要な役割を担うことになる。初代校長には、鹿児島出身の柏田盛文が抜擢された。同年8月には、医学部も金沢に設置された。全国的にみて各県の医学校が廃止される趨勢の中で、高等中学校の医学部も金沢に

序章 前身校の歩み

設置されたことは、後の金沢医科大学の発展を支える土台ともなった。同年10月、文部大臣森有礼臨席のもとに開校式を挙げる。翌88年3月には、敷地を広坂通り、仙石町および西町2万余坪に決定した。1892年4月には新築校舎も落成し、翌年10月には時習寮も開設した。1894年7月、「高等学校令」に基づき大学予科および医学部を置き、第四高等学校と改称した。1898年2月には、北條時敬が校長に発令され、四高の風紀が刷新された。1901年4月、医学部を分離独立させて金沢医学専門学校とした。1915年10月、寮歌「北の都」が誕生する。1923年4月には第十臨時教員養成所を附設したが、31年3月にはこれを廃止した。1949年5月、国立学校設置法により金沢大学に包括されて、金沢大学第四高等学校となった。翌50年3月、60年以上にわたる歴史に幕を下ろし、全国の旧制高校とともに四高は廃校とされた。

(2) 石川師範学校

1874(明治7)年8月、小学校教員を養成するために石川県集成学校として設立された。同年11月、石川県師範学校と改称。翌75年、女性教員養成をはじめ男子師範校舎内で修学させた。これが石川県女子師範学校のはじめとされる。1883年11月、女子師範を併合する。1889年11月には、四高に仙石町の校地を引き渡して広坂通り88番地に移り、1913年4月には石川郡野村の新築校舎に移転している。1914年4月、石川県女子師範学校が分立した。1943年3月、石川県師範学校は「師範学校令」により専門学校に昇格し、文部省直轄学校となった。同年4月、石川県女子師範学校を合併して、石川師範学校男子部・女子部となり、男子部を弥生町に女子部を広坂通りに置いた。1948年11月、当初は石川教育大学設立のために準備を進めていた「暁烏文庫」を、男子部附属小学校前庭に竣工する。1949年5月、新制国立大学の金沢大学に包括されて金沢大学石川師範学校と改称し、51年3月に廃止された。本科以外の課程修了者を含めて、石川師範学校卒業者数は6,750余名にも達した。1915年以降の石川女子師範学校(石川師範女子部も含む)卒業者数は2,470余名である。

(3) 石川青年師範学校

1918(大正7)年4月、石川県立農業学校教員養成所として設立された。21年4月、石川県立実業補習学校教員養成所と改称。1937年4月、石川県立青年学校教員養成所に改設し、石川県立女子青年学校教員養成所を設立する。1944年4月、女子青年学校教員養成所を合併して石川青年師範学校となり、河北郡津幡町に設置された。46年6月、金沢市野田町に移転する。49年5月、金沢大学に包括されて金沢大学石川青年師範学校となり、51年3月に廃止された。養成所時代を含めて、石川青年師範学校卒業者数は560余名である。

(4) 金沢高等師範学校

1944(昭和19)年3月、勅令第132号をもって金沢高等師範学校は設置された。金沢市から中村町国民学校の校舎・敷地の寄附を受ける。同年5月、第1回入学式を挙行した。同年12月、文部省の指定により特別科学教育研究班を金沢高等師範学校内に設置した。1946年9月、金沢市野田町180番地へ移転する。翌47年3月、理科(1部数学科・2部物象科・3部生物科)の外に、文科(1部英語科・2部地歴科)を開設した。49年5月、金沢大学に包括されて、金沢大学金沢高等師範学校と改称。1952年3月、廃止された。8年間しか存続しなかったが、金沢高等師範学校卒業生数は390名を超える。

(5) 金沢医科大学

1862(文久2)年3月、加賀藩は金沢彦三八番丁に種痘所(心学講舎反求舎内)を設立する。1867年10月、卯辰山に藩の養生所を設立し、これに医学館と薬圃を附属させた。68年7月、藩命により黒川良安らが長崎に赴き、医学校および病院の制度を調査した。後につくられた黒川のレリーフが、現在宝町の医学部キャンパス内にある。1870年2月、大手町旧津田玄蕃邸に金沢医学館と病院を開設し、71年3月、オランダ人スロイスが医学館に着任した。1875年8月、医学館は県立となり、石川県金沢病院と改称する。翌76年8月、医学館は医療と医育部門を分離し、医育部門は金沢医学所、医療部門は金沢病院となった。1878年10月、明治天皇が北陸東海巡幸の折、医学所へ行幸した。79年6月、殿町の松平大弍邸跡に金沢病院を新築し、旧建物を医学所とした。同年11月、福井・富山の両医学所を金沢に合併し、金沢医学所を金沢医学校と改称する。1882年5月、文部省医学校通則が制定され、医学校は甲乙に区分し、甲は東京大学出身医学士3名以上を有することを条件とした。同年7月、金沢医学校通則が改正され、同年11月、金沢病院をもって金沢医学校の実習研究の用を兼ねさせた。1884年3月、金沢医学校は石川県甲種医学校に昇格する。87年8月には、第四高等学校の医学部となる。これに伴って、翌年3月には石川県甲種医学校は廃止された。四高に加わった折、医学校を蔑視していた本科生との間で軋轢が生じたりした。92年4月、校舎が仙石町に新築され基礎学科が移転した。94年7月、「高等学校令」に基づき第四高等学校医学部と改称。1896年11月、医学部『十全会雑誌』第1号を刊行する。1901年4月、医学部を分離独立させて、金沢医学専門学校とした。1903年3月、勅令第61号によって、仙台・千葉・金沢・岡山・長崎の官立5校は医学専門学校となった。1905年3月、県立金沢病院が小立野に新築完成して移転する。1912年3月、病院(小立野)横に建設中の校舎が竣工し、同年7月移転する。1922年4月、石川県金沢病院を官立に移管して附属医院とした。同年12月、十全会より文部省へ十全記念館を寄附し、23年4月、金沢医科大学が発足した。39年5月、戦局の要請を受け

序章 前身校の歩み

て臨時附属医学専門部を設置する。1942年3月、結核研究所を設置した。敗戦後の46年3月、泉本町に学生寄宿舍開設。49年5月、金沢大学医学部が発足し、翌年4月、金沢医科大学最後の入学式を挙げる。1952年3月、軍医養成を主とした金沢医科大学臨時附属医学専門部を廃止した。1954年3月、金沢医科大学を送る会（最後の卒業式）を開く。1958年10月、昭和天皇・皇后の行幸を受けた。1960年3月、法律第16号により、金沢医科大学は廃止された。

（6）金沢医科大学附属薬学専門部

1867（慶応3）年10月、卯辰山養生所内に製薬所舎密局を附設する。70年2月、卯辰山養生所製薬所を加賀藩医学館製薬所と改称し、大手町に移った。71年3月、教授として着任したオランダ医師スロイスが薬剤師養成の必要性を説く。同年7月、兼六園内に理化学教室設置。1876年8月、金沢医学所薬局学科となる。79年5月、堤従清など初めての卒業生を出す。同年11月、金沢医学校製薬学科と改称。1885年1月、石川県甲種医学校附設乙種薬学校となった。89年4月、第四高等中学校医学部に薬学科附設。92年、医学部の大手町から広坂通りへの移転に伴い、薬学科も新築移転した。94年7月、第四高等学校医学部薬学科と改称。1901年4月、金沢医学専門学校薬学科となる。1923年4月、金沢医科大学の発足により金沢医科大学附属薬学専門部となった。29年、小立野の地に移転する。室生犀星作詞・弘田龍太郎作曲の薬学生歌「名無草」が誕生。1949年5月、金沢大学薬学部発足。初代学部長には、薬学部独立に尽力した鶴飼貞二が就任し、1951年3月には、金沢医科大学附属薬学専門部は廃止された。

（7）金沢高等工業学校

1920（大正9）年11月、勅令第551号により金沢高等工業学校が設置された。同年12月、青戸信賢が初代校長に任命された。翌21年4月、第1回入学宣誓式を挙げる。同年9月、水上次吉・川路柳虹作詞、弘田龍太郎作曲の校歌制定。1924年3月、第1回卒業式挙行。金沢工業会（同窓会）創設。『校友会誌』第1号が発刊された。35年4月、機械工学科より出火があったが復興。37年8月、戦時体制強化のため臨時別科として工業技術員養成科を設置した。1939年4月、機械技術員養成科設置。土木工学科・機械工学科・応用化学科の外に、化学機械科・電気工学科を増設した。1943年3月、工業教員養成所附設。44年4月、金沢工業専門学校に改称する。第二機械科増設。45年4月、第二土木科および電気通信科増設。46年4月、精密機械科を新設し、計9学科となった。47年5月、金沢工業専門学校大学昇格期成同盟会を結成。同年10月、昭和天皇の行幸を受けた。1949年5月、金沢大学工学部が発足し、1951年3月金沢工業専門学校は廃止された。

『金沢大学十年史』の「編集後記」には、「本学の基盤になった金沢医科大学、附属〔ママ〕薬学専門部、第四高等学校、石川師範学校、金沢工業専門学校等はいずれもわが国で有数の歴史の古い学校で、各々輝かしい伝統を持っていた。」（前掲書）と記されている。その通りであることは自ずと以下の叙述で確認できるのではなかろうか。